



始



404
5

特265
861

パンフレット第五十七

他力本願の道

曉
鳥
敏
著

特265
861



曉
鳥

敏
著

他力
本願の道

北安田
香草
舎
版



出た本願の鼓

ほてー此の
太陽の光
移しこめ
おと
おと
おと



露光量違いの為重複撮影

表面の寫眞は報恩講の日 曉烏先生よりいたゞいた御揮毫と當日御名號の前で御講演の先生とであります。

北 橋 茂 男

は し が き

私どもが一生涯を通じて遇はうとして遇ふことの出来ない、建國二千六百年の記念する國家的盛典に日本臣民の一人として遇はせていたゞき、今更乍ら皇國日本に生を享けた吾の尊さを知り、その感激と悦びに浸るとき去ル十一月二十二日よき御法縁にめぐまれ、同郷の師、曉烏敏先生の御來駕を得、私と心を俱にする方々と打揃つて二千六百年の意義ある報恩講を、天神ノ森の自宅でつとめさせていたゞきました。これと云ふのも私どもが、宗教のさかんな北國に生れたおかげで、どうやら商賣も満足にさせていたゞいてゐる土徳(先生の所謂)によるものと深く感ずるのであります。

従來は何か判らぬなりに、私共が店員さんの採用に當つて初對面の折、その家庭の宗旨の何宗なるかを訊き、その本人を知りその家庭を知る事に努め

露光量違いの為重複撮影

表面の寫眞は報恩講の日 曉烏先生よりいたゞいた御揮毫と當日御名號の前で御講演の先生とであります。

北 橋 茂 男

は し が き

私どもが一生涯を通じて遇はうとして遇ふことの出来ない、建國二千六百年の記念する國家的盛典に日本臣民の一人として遇はせていたゞき、今更乍ら皇國日本に生を享けた吾の尊さを知り、その感激と悦びに浸るとき去ル十一月二十二日よき御法縁にめぐまれ、同郷の師、曉烏敏先生の御來駕を得、私と心を俱にする方々と打揃つて二千六百年の意義ある報恩講を、天神ノ森の自宅でつとめさせていたゞきました。これと云ふのも私どもが、宗教のさかんな北國に生れたおかげで、どうやら商賣も満足にさせていたゞいてゐる土徳(先生の所謂)によるものと深く感ずるのであります。

従來は何か判らぬなりに、私共が店員さんの採用に當つて初對面の折、その家庭の宗旨の何宗なるかを訊き、その本人を知りその家庭を知る事に努め

二
て來ましたが、大抵の場合その家庭にガッチリした宗教があり、愛兒の教育にも知らずくのうちに是が採り入れられてゐるやうな家庭のお子さんは、態度・言葉遣ひにもどこことなくよやかな氣風がうかがはれ、入店後は人との和に於ても仕事の上にもよくそれがあらはれ、責任も重んぜられるしよく辛抱もされます。同時に、その家庭を訪問せずともタッタ一本の手紙に依つて宗教的・信念の横溢するなごやかさがよくあらはれて居り、その御両親の人となりと云ひ家庭の全體までがよくうかがひ知ることが出来るのは不思議な位であります。この一事に依つて見ましても宗教は、私どもの日常生活の上にも亦商賣を續けて行く上にも絶對的なものと信じ

「皇國に生れし者は吾の尊さを知れ」

「信仰は凡ゆる智識の極度なり」

との格言を引用して私どもの店訓とし、お互の心の糧として來ましたが、この度先生の御法話を聽聞させていたゞいたことによつて、盲目的な私どもの歩みに一道の光明が與へられ、何か知らバツと目先きが明るくなり、力強く踏み出せる悦びを感じたのであります。なぜならば先生の御法話中に「日本の佛教は國教であり、和の宗教である、天照大神様の和魂、日本精神の中心が和である。建國の祖神武天皇様の大御心、八紘一宇の御精神が和魂であり、大和魂である、この御精神を人皇三十三代の推古天皇の御代に時の攝政の御位にあらせられた聖德太子様が私共に判り易くお説き下さるために佛教を國教とお定めになつたのであるから、佛教を信することは日本精神の發露であり、尊皇の心であると同時に皇國に生を享けた者の最大の悦びでなければならぬ」とお説きになり、更に又「今までの君は土徳による營業を通じて、少しでも安くてよいものを満足して食べていたゞくことに努力してきたが、今度はそれを精神的な糧、心の御飯を奉謝してゆくことが君の終生の仕事で

「はないか」とおきかせいたゞいたその悦びが胸に満ち溢れ、こぼれたその瞬間にこれほどの悦びを自分一人が味ふには餘りにも冥利に盡きる、せめてこのこぼれ落ちた悦びを一人でも多くの人に味つていたゞき、俱々に随喜讃仰の氣持に浸ることが出来ますならば、と思ひ立ち、曉烏先生の御快諾を得まして、大きな悦びをこの小さな冊子におさめ、年改る御挨拶に代へて皆様にこの法悦をお頒ちすることに致しました。

昭和十六年一月

大阪 會社 パンヤの食堂

味に輝く 食堂ビル **北極星**

北橋 茂 男

他力本願の道

昭和十五年十一月二十二日
大阪 北橋家にて

曉 烏 敏

今日は不思議な御縁で北橋家の報恩講の御縁にあはしていただきます。二ヶ月前まで實は私は北橋さん知らなかつたのであります。北橋さんは四十一歳だと云はれますから、四十一年間同じく日本の國に生をうけ、殊に同じ縣下に生をうけてをり、大阪へは私はしばしば來てをりますのに、その人を

知らんできたのであります。ところがその二ヶ月前までしらなんだ人に最も大切な御法要に招かれて、御縁をいただくといふことは本當にありがたいこととであります。どうして私がこちらへ来るやうになつたかと云ひますと、先づ近いところの手引をしてくれられたのは、手紙やら言葉で傳へられたのは、大阪で生れられた秦さんであります。秦さんがどうして北橋さんを知られたかと云ひますと、秦さんも二ヶ月前までは知られなかつたのです。秦さんに北橋さんのことを傳へられたのは森さんである。森さんは十數年以前私の宅の講習會に屢々見えた方である。殊に國の河北郡の方であり、高光大船君の話をよく聞いてをられた方であります。その森さんが北橋さんに因縁があつて、北橋さんの道を求められる心の成長するのを見て、自分の歸依してをる先生をこちらへ招かれてはとすゝめられたので、北橋さんは大變喜んでそれに賛意を表された。それから縁を求めて秦さんに傳はり、そして私に傳はつ

たのであります。そのをりに、北橋さんが、やはり石川縣出身の永井柳太郎さんを先輩として歸依し、懇意にしてをられるといふことを聞きました。永井さんは私も大變懇意にしてをりますので、北橋さんには逢はない前から一道の脈絡がついてをつたやうに感じました。紹介された森さん、また北橋さんが、永井さんに歸依してをられるといふことを秦さんから聞いて、直ぐまゐりませうと承諾が出来たのであります。實は私は頑な性であつて、人にはじめて逢ふことに、一種のはにかみと申しますか、臆病と申しますか、好かぬのであります。といふのは、私はたくさんのお友達はほしいのであります。が、お友達の出来るのはうれしいが、お友達の去つていかれるのは非常に悲しいのであります。さういふ關係ではじめて交るときにはよほど躊躇いたします。殊に御法要に招かれるといふことについては、純粹な意味で招く人ばかりではありませんので、やはりよほど用心するやうな氣がいたしてをります。

御縁はなるだけひろくいただきたいのだが、眞實の法の交りといふことを望むために、はじめてまゐりますときによほど躊躇いたします。殊に世の中の所謂成功者といふやうなお家にゆくときには尙更躊躇するのであります。縣下に長く縣會議長などしてをつた人で、衆議院議員にも出てをつた人が、五六年前に人を介して私を招かれました。私はまゐりませんでした。あの人が法縁を開くことは珍しいことだから、どうぞいつてあげて下さいと云はれましたけれど、あの人だから私はいやだ。どうしてですか。あの人は今まで政界に立つて何でもしてきた人である。法を聞くにもわしが招いたら誰でも來るといふ輕らかな考があるやうに感ずるからいやだ、本當に來てほしかつたら御本人が招待にお出になれば、その時私の氣が向けばまゐります、あなたが云うただけではいやです、と云うたのです。間もなくその人は病氣で死なれました。本年遺族の方から、老人が大變懇望して死んだのですから來て

四

ほしいと招かれた。死なれてあとに遺族にさういふ念が起るといふことは本當に思つてゐて下さつたのであらうと思つて、今年そのお宅にまゐりました。亡くなつた方と共に遺族の方やたくさんの人々と御法縁をいただいできたのであります。さういふやうな心持をもつてをる私は今日は實に氣持よくこちらにまゐつたのであります。北橋さんには一昨日三日ではじめて逢ひました。逢うた時から氣持がよかつたので歸りに戎町の觀光食堂に寄れと云はれるまま寄りました。そして御馳走をいただいできたのであります。はじめから私の好きな人である。何か我が子供のやうに思はれるので今日は喜んできたやうな次第であります。

ここに來て報恩講の御縁にあうてさつきから考へてをつたのであります。報恩講といふことは大變ありがたいことであります。報恩講といふのは親鸞聖人の教の流をくんでをるものは、一年に一度我が家に聖人の靈をお招きし

五

て、一年中の教の恩を思うてお禮の御饗應を申すといふやうな意味で、今は寺々を始として、又親鸞聖人のお流をくむ家々でもつとめられてをるのであります。その源は、京都の聖人のお墓の前でつとめたのであります。

親鸞聖人は高倉天皇の承安三年の四月一日に京都で御誕生になりました。それから九十年の間日本の國に生きてをられまして、龜山天皇の弘長二年十一月二十八日に御往生あそばしたのであります。おん父は藤原家の流であつた。藤原家のよほど別家のうちの、その弟で有範卿と申された。有範卿は皇太后宮の大進をつとめてをつた方でありました。あまりお位は高くありませんでした。母上は日野家から嫁いで来てをられました。日野家は今の山科あたりにありました。聖人は山科の方でお生れになつたのであります。今山科に聖人の御誕生の跡が残つてをります。その近邊に本派のお寺が建つてをります。聖人は四つの年にお父さんの有範卿に別られたのであります。昔私共

が聖人の傳記を習うた時にはお父さんは死なれたのだと聞いてをりました。さういふ工合に書いた本もありますが、近來一般史學の研究が發達いたしました。聖人の傳記についてもいろいろ新しい史料が集つてまゐりますので、お父さんは死なれたのではなかつたといふことがわかりました。すつとあとに有範卿の名が或本に出てをるさうであります。さういふところから何か因縁があつてお父さんは身をかくされたのである。それは或は當時の政争によるのかもしれない。當時は源平の争がありました。藤原家のうちでも源氏につくものもあり、平氏につくものもあつた。さういふ關係でまだ若かつたけれども、どこかに身をかくされたといふやうなことがあつたのかもしれない。さういたしますとお父さんの有範卿は當時の日本の政治的の推進力をつくる一つの年少氣鋭の青年公卿であつたといふことが察せられます。さういふことを思ひますと、聖人には日本のお國の天皇陛下の臣民としての自覺、

今日の言葉で云へば大政翼賛臣道實踐の覺悟が沸いてをつたといふことが思はれるのであります。聖人はおん父上と別れて弟の方と共に伯父さんの從三位範綱卿のところにあづけられてをられました。

聖人は九歳の時自ら出家を願はれました。當時さういふことが一般の風習になつてをつた。皇族のお方とか或は公卿の方とかで政治に携はれなければ出家をするといふ風習がありました。その頃は政治家といふものがあり、武人といふものも出来てをりました。僧侶といふ階級は今日で云ひますと丁度學校の先生といふやうな地位であります。民衆の文化的教化の任に當る人であります。大體日本の國に佛法の弘つたのは今から千三百年前、人皇第三十三代推古天皇の御代であります。推古天皇の十二年にはじめて日本に憲法が制定せられた。その憲法の第二條に「篤く三寶を敬へ。三寶とは佛法僧なり。則ち四生の終歸、萬國の極宗なり。何れの世何れの人か是の法を貴ば

ざる。人尤だ悪しきもの鮮し、能く教ふるをもて從ひぬ。其れ三寶に歸りまつらば、何を以てか枉れるを直うせむ。」と記されてある。この憲法の第二條によつて佛教が日本の國教と定められたのであります。如何なる人間も極端に悪いといふものはをらぬ、教養さへすれば立派なものになる、その教養のために佛法僧の三寶を敬ふことを教へられたのであります。ですから日本の佛教は國教である。日本の天皇陛下が臣民を教養するために採用せられた教であります。ですからその時から佛教の僧侶は國民教育の任にあつてきたのであります。それから百年あまりたつて、奈良朝時代に聖武天皇は殊に佛教に御歸依あらせられました。光明皇后様と共に深く御信心をおよろこびになりました。天皇は先づ大神宮様の御心をうけられました。行基菩薩をして大神宮様の御心を窺はせられ、大神宮様を人間の姿にお拜みあそばすために佛像を鑄造せしめられました。それが今日の東大寺の大佛様であります。

今日、神様と佛様とはどういふ關係にあるかといふことがよく云はれてをります。奈良の大佛様は天照大神様を佛の御姿に鑄造せられたお姿であります。あの大佛様は神佛一體のお姿であります。天照大神様は日本の皇祖皇宗にまします。高天原にお出になるお姿はお日様であります。それをこの國に御像を下さつたのが三種の神器であります。殊にそのうちの御鏡には勅語を添へられて、

此レノ鏡ハ専ラ我ガ御魂トシテ吾ガ前ヲ拜クガゴト齋キ奉リ

タマヘ

と仰せられました。其御鏡は伊勢の皇大神宮の御本體であらせられます。皇大神宮に行基菩薩が參籠して天照大神様の御心をうけられ、天皇様のお勅命に従うて大佛様を建立されました。だから大佛様は大日如來であります。印度の言葉では盧遮那佛であります。大日如來は日の神様に相通じてをるので

あります。我々は天照大神様の八紘一宇の大きい御心を奈良の大佛様の上に拜むことを聖武天皇様から御教をいただいたのであります。ですから今日佛法を非議するものは、この萬世一系の天皇様の御心に従はないことになります。近來日本精神を云々する人に、時により佛法を非議するものがあります。これは以ての外であります。しかしながらまたその佛法を非議するといふことは、今の佛法護持の任に當つてをる僧侶が、あまり社會國家のために御用に立つてをらないからだといふことも思はれます。これは我々佛門にあるものが佛様に向うてお詫び申さねばならんことであります。貴い教を穢し、お國の人に謗法罪をつくらしめ、進んでは佛法を崇めたまうた天皇様のお徳にまで累を及ぼすといふことを思ひますと、實に佛門に生きてをる私共は慚愧に堪へないのであります。最近大政黨翼賛運動の中心が、日本臣民の道の實踐にあると近衛首相はしばしば聲明してをられる。その日本臣民の道は『十七

條憲法』に「私に背きて公に向ふは是臣の道なり。」とあります。その私に背いて公に向ふといふことは佛教の根本の御教であります。この際佛門にあるものは戦争の第一線に従事してをられる將士の方々にも劣らない決意をもつて、この日本臣民の道の實行に、自らもつとめ、他をも誘引して御奉公致さねばならんと思ふのであります。

桓武天皇様るとき弘法様・傳教様がお出ましになりました。共に支那に渡られまして佛教を傳へて來られたのであります。弘法様は高野山をいたただかれ、傳教様は比叡山をいたただかれ、そこに教の本を築かれました。何のためかといふと、高野山も人物の養成であります。比叡山もさうであります。さうしてそれは鎮護國家のためであります。申しおくれましたが聖武天皇様は大佛様を建立せられ、諸國に國分寺を建てられ、また國分尼寺を建てられました。かくして日本中の男女の精神教育をせられたのであります。ですから

今でいへば東大寺は中央の大學であり、國分寺國分尼寺は地方の師範學校であつたわけである。そのあとをうけられました傳教様は比叡山に、弘法様は高野山に人物養成の學校を建てられました。そして諸國から英才を集めて教養し、それをまた諸國に派遣されました。昔は高野山も比叡山も女人の登ることを禁ぜられておりました。それは何のためかといふと、そこでたくさんの青年を黨育してをる、若い學僧に女の姿の見えることは心を亂すといふので、女人を禁ぜられたのであります。佛教の教は決して女を輕蔑するからではなかつたのであります。今でも男の學生のところ、女の出入りを禁じ、或は女の學生のところ、男の出入りを禁ずることがあります。それはあの青春の時代は迷ひ易いときでありますから女人禁制といふことになつたのであります。それを佛教は女を卑めるといふやうに後世の人が云ひふらすのは以つての外のことであります。高野山や比叡山は全國の人を黨育する人物をつく

るところであります。かやうに佛教は日本の全臣民の精神教養に當つてきたのであります。

鎌倉時代は政變と共に佛教の新しい光のさした時代であります。この時代に法然聖人がお出ましになりました。このお方は當時一番目立つた方であります。比叡山で得度せられ、當時天台宗の一僧侶でありました。後に比叡山から下りて京都の東山の吉水に庵を結んで念佛の道を教へてをられました。當時天皇、上皇、法皇が御歸依になりました。關白兼實公を始として高位高官の人々或は武士乞食非人に至るまで教化をうけたのであります。當時奈良の大佛は火災にあうて再建せられました。法然聖人はその導師の任に當られたのであります。一代を風靡した方であります。その法然聖人のお弟子はたくさんありましたが、そのうちの一人が親鸞聖人であります。それから同じ時代に京にたくさん禪寺が開けた。榮西禪師は今日の臨濟宗を開いたお方で

ある。同じく禪を傳へられた方に、稍後れて道元禪師があります。この方は晩年越前の永平寺にをられた。今日の曹洞宗の基になつてをります。日蓮上人、この方は安房の國に生れられて比叡山で修行をし、後安房の國で新しく『法華經』による宗旨を開かれた。これが日蓮宗である。それらの方々のことはしばらくあづかりまして、親鸞聖人のことを窺はしていただきます。

親鸞聖人は先程も申しますやうに、九歳のときに出家せられました。當時の僧侶といふのは國民教育の任にあたつてをるといふやうな意味でありますので、出家するといふことは世捨人になるといふことではないのであります。お國の御奉公の別途として名門の方が出家せられたのであります。それを、佛教の日本における本來の性質を知らぬものは、出家するといふと、世の中を捨てることだと思つてをるのであります。それはやはり日本の佛教を知らないのであります。日本の佛教は始からお國の御用にあづかつてをり、教育

の任に當つてきてをるのであります。政治や軍事の方面の御奉公はしないで、國民教化のための御奉公をするといふのが僧侶になる意味合ひであります。聖人は九つのおときに出家の念を起されました。それには、お母さんに早く別れられたといふことと、お父さんが政治的の運動のために身をかくされたといふ内面的關係もあると思ひます。伯父さんはその志望を聞き入れられまして、和歌のお友達である慈圓慈鎮和尚の許に連れていかれました。慈鎮和尚は、長く比叡山の座主をしてをられたが、それを退引して後進にゆづり、京都の粟田口の青蓮院に住んでをられました。百人一首の中には、前の大僧正慈圓と書いてある方です。その方のもとにつれていかれました。この慈圓といふ方は當時の關白兼實公の庶兄であります。側女の腹に出來られたお子さんであります。大變學問もお出來になる方です。著書にも有名なのが残つてをります。聖人はそこへ連れていかれたのです。三月十五日であつた。昔

は三月であるが、今の四月である。櫻の花ざかりであつたさうであります。範綱卿は九つの子供を連れていつて、これは私の弟の子であります。出家したいと申します、お世話を願ひたい。かういふことでありましたらう。よくみられて、これはよい子だ、お世話しよう、と引受けられた。それぢやよろしくお願ひいたしますと四方山の話をして夕方歸らうとなされた。九つのお松若君は歸らぬと云はれる。どうしてか。わしはこの弟子に來たのである。歸らぬ。それぢや困る、お約束はしたのだから今日歸つて日を改めて入門の式をしていただくから今日は一應歸りませう、と云はれても、わしはここにをると云はれる。さうすると御師匠様は入門の式をするにはいろいろの準備があるから今日俄にといふわけにいかん、この次にお出で、と云はれる。いやだ。聖人は子供の時から頑張りであつた。聞き入れられない。いくら云うても聞かれなかつた。當時作者未詳の歌で、或は和泉式部の歌とも云はれて、

人口に膾炙してゐた歌があつた。

明日ありと思ふ心のあだ櫻

夜半にあらしの吹かぬものかは

明日花見にいかうと思つてをつても今夜のうちに嵐がきたら見られなくなる、花を見ようと思ふなら今夜見に行くことだ、かういふ意味の歌である。九つの子供であつた聖人も覚えてをられたのです。この歌を口誦された。これは聖人の九つの時におよみになつた歌だといふ人もあるが、聖人のお作りになつた歌ではなくて、當時流行つた古人の歌を覚えてをられたのである。その歌を聞いて老人達は子供に教へられたのである。それぢや、といふので早速俄に夜分蠟燭をともして入門の式をせられたのである。私はいつも九つの時の聖人のことを思ふと、やはりお父さんが國のために身をかくされたといふ、その血が傳はつてをる、きかん氣である、一徹である、といふこ

とを思ふのであります。思うた念力岩をも徹すといふ傾向の人である。後になりまして阿彌陀如來の御本願に深く歸依されたといふことも偶然でなかつたと思ひます。私もいつもこのことを思うて、思ひたつたらそれを今やるといふやうにしてをります。佛法には明日といふことはなく候、と云はれてをります。何でも思ひたつたときにそれをやる。昔から明日明日と思つてをるものには明日はいつも逃げてゆく、と云はれてをります。仕事をするにも明日やらうと思つてをると、明日になるとまた明日になつて、どこまでものびる。思ひたつた今やれといふことを教へられます。聖人は九歳のときにそれがはつきりしてをつた。思ひたつた今るとき、それが大事なことであります。聖人はそれから慈鎮和尚の門で修行せられました。後に比叡山に登られました。

その當時の比叡山には修行されるお坊さんの種類に二通りあつた。名門の

方で家から學資金を持つてきて學問をする人達、かういふ人達は學僧というた。もう一つは堂僧というて、家から學資金をもらはず、お寺のお掃除をしたり、炊事の手傳ひをしたりして修行する人々であつた。聖人は學僧でなく、堂僧の方であつたといふことである。これは近來の學者のしらべたことであります。ですから聖人は貴族の出であつたけれども、貴族然とした教育はうけられなかつたお方であります。實際に炊事をしたり、掃除をしたりして學んでいかれたのであります。ここに聖人に道の開かれる本があつたのであります。十九歳の年に河内の磯長の聖德太子の御廟に參籠せられました。その頃比叡山にもたくさんの學者もあつたのであります。親しく得度さしていただかれました。慈鎮和尚もをられた。しかし聖人は當時の佛敎界に慥らなかつたので、直接聖德太子様の敎をうけられた。ここにも聖人の徹底的な心持が窺はれます。河内の磯長には聖德太子と太子の御母君と御妃のお三方

のお骨の納つてあるお陵があります。明治以前まではその叡福寺においてお守りしてをられたのであるが、今は宮内省の御陵のお係り方が守つてをられます。これは大阪あたりの方はおまゐりになるとよいと思ひます。大阪から一時間ほどでいわれます。聖人はこのお陵に參籠して心の光を求められたのであります。その時太子様から夢のお告を受けられました。長いお言葉であります。その中に、「日域は大乗相應の地」といふ言葉があります。日域は日本の國、日本の國は大乗佛敎の相應の地とある。相應といふことは實と蓋とがしつくり合ふことである。このことからみると日本にも大乗佛敎はあつたのだ。印度支那を経てきた大乗佛敎と、日本の大乗佛敎としつくり相應するのだといふお告であります。このお告によりますと、印度支那から渡つてきた佛敎と、日本の神様の御代から傳はつてをる佛敎と二つ一緒に合うたのである。日本の神代から傳はつた佛敎は佛敎と云はんで、神ながらの道と

いふのである。印度からきた教は佛教といふ。神ながらの道と佛教とが相應するといふお告を受けられた。これが十九歳の時である。ここに聖人におきましては日本の神様の教と印度支那からきた佛様の教といふものがしつくり一つになつていくといふことの指導をうけられたのであります。そしてまた「善信善信眞菩薩」といふお言葉をも聞かれた。善信は聖人のお名である。それまで菩薩といふのは印度にはあつたが支那日本にはなかつた。ただ奈良朝時代に行基菩薩お一人があつた。聖人はまのあたり眞菩薩の名を受けられた。奈良朝には日本に菩薩はあつたが、後の日本人が菩薩を名乗らんやうになつたところに、だんだん平安朝の佛教の墮落があつたのです。それは日本式のもの支那式印度式に感化されて、日本は印度の下風にたつものやうに考へられてをつた。ところが鎌倉の時、親鸞聖人は善信善信眞菩薩といふ聲を聞かれた。聖人はその菩薩といふ聲を聞きながら底下の凡夫として自覺

されたのであつたが、日蓮上人は日蓮大菩薩地涌の菩薩といふ自覺を得られた。これは行基菩薩以来であります。その日蓮上人の自覺にも貴い日本式の輝きをみます。親鸞聖人は十九歳のときに聖徳太子のお告げを受けられた。聖人はそれから十年修行せられた。ところがなかなかわからぬ。聖人は當時天台宗の僧侶としての地位が高まつて聖光院の門跡にまで上られた。しかし僧の位は上つても心が明かにならぬといふので、再び聖徳太子様の教をうけられた。今度は京の六角堂の觀音様に起請をこめられた。觀音様は聖徳太子の御本地であつて、六角堂は太子様の御建立であります。三里八町の道を百夜の御起請をせられた。さらら坂を通過うていかれた。晝の御修行を了へ、夜分六角堂にいかれ、朝歸られる。

範宴はあやしいぞ、毎晩どこかに出てゆく、京にかくし女があるのだといふ評判がたつた。お弟子の方は後をつけていつて聖人が觀音様におまゐりに

なるお姿をみて、懺悔したといふことであります。當時さういふことが風聞にたつやうに、比叡山の僧侶にもいろいろのことがあつたのです。それほど聖人は熱心にお通ひになつた。願の満つる日に近くはからずも先輩の聖覺法印に四條の大橋で逢はれた。いろいろお話の結果、聖覺法印は、わしは道を求めて師匠を得た、それは吉水にをられる法然聖人である、あなたもお出になりませんかと誘はれた。四條から吉水は近いです。聖人は聖覺法印に導かれて吉水の法然聖人の禪室を訪ねられた。その時の禪室のあとは今の智恩院の鐘堂から南の方の近いところにあります。東大谷にいく道であります。聖人が法然聖人の一席の御法話ではつきり自分に感得せられたのは佛様の御本願に相應したお念佛の道であります。それが二十九歳の時であります。それから法然聖人のお手引で結婚された。三十一の時であつた。お二人で教をうけてをられたが、三十五の歳に法然聖人の僧團に法難がきました。お弟子の

うちに國の法にふれる人が出ました。それはいろいろの誤解もありましたらう。他のいろいろのこともありましたらう。ともかく法然聖人の僧團は盛なものでありました。法然聖人の説かれる教は今までの佛教と趣がらがうてをつた。今までの佛教は倫理的道德的にとどまつてをりました。法然聖人はさうでなしに、その一つを云ふならば、善人と悪人とある、悪人の力が佛の目當である。善人が佛になれるなら悪人の力が尙佛になれる。その悪人は自分の行で佛になるのではない。佛を念ずる念佛で佛になるのである。さういふ教である。人間はいくら善を積み重ねようと思つてもろくなことが出来な。尙悪くなる。それを捨てて佛に歸依する、といふことによつて助かる。これは今日でも同じことである。我々が天皇陛下に忠義をするといふことは我々の行をいくら積重ねても忠義にならぬ。それを捨てて天皇陛下の仰に従ひまつるといふところに臣民の道が全うせられるのであります。佛教にお

いてもその通りであつて、法然聖人はその傳統のことを説かれるのであるけれども、當時局外のものにはわからぬ、お弟子になつてをるものにもわからぬものがあつた。悪いことをしても南無阿彌陀佛を稱へれば助かると聞けば、南無阿彌陀佛を稱へてそれを看板にして悪いことをするものがある。いつでもさういふことがあります。非常に嚴肅な教が非常にみだらな教のやうに受取られることがある。今日の眞宗なども稍さういふ傾向があります。さういふ弟子もあつてさうした非難もあつたのです。法然聖人が『選擇集』といふ本を著されたときに、當時最も嚴肅な僧侶として知られてゐた梅尾の明恵上人や笠置の解脱上人などは批評を書いてをられます。それは法然聖人の教を學問的に非難されたのであります。これは一面の眞面目な疑問であります。さうでなしに聖人の念佛の教を曲解したいろいろ社會的な非難もあつた。さういふ時代であります。そこへ丁度問題が起つたのです。お弟子の住蓮房、安

樂房といふ人が鹿谷で念佛を稱へてをられた。當時後白河上皇が熊野へ御參詣せられました。そのお留守に上皇の御寵愛のふかい女官が東山を通られた。そして住蓮房、安樂房の稱名の聲に感じて、何かお心の苦しみがあつたものと見えて出家を願はれた。弟子入りを願はれたのです。二人は斷つた。しかし死をもつての願である。それで願を許して弟子にした。さて上皇がお歸りになりますと側に事へてをつた女がをらぬ。松蟲、鈴蟲といふ女官である。その眞實のことはよくわからぬが、ともかくも法然聖人の門弟には女房をもつてをる人もあり、悪いことをするものでも助かる、盗みをしても助かる、といふので非難のあつたところへ、さういふことになつたものだから、住蓮房、安樂房は宮中の女官をたぶらかした、もつての外、といふことで二人は死罪に處せられた。さういふ教をすすめる法然聖人も悪い、大體念佛が悪いといふことで念佛禁制といふことになつた。そして吉水の教團は解散を命ぜ

られた。師匠の法然聖人は土佐の國に流罪といふことになつた。弟子の主な人も各地に流罪になつた。親鸞聖人はその一人として越後の國に流罪になつた。その時聖人は三十五歳であつた。この時奥様とお別れになつた。今の直江津の近邊の國府に二年お過しになつた。わびしいおすまひであつた。それから後に新潟の近邊鳥屋野におうつりになつて三年、都合五年間越後にお出になりました。

そのうちに政界の風雲も一掃され、誤解も解けた。法然聖人の流罪は許され、その他の方々の流罪も許された。法然聖人は最初土佐に御流罪になつたが、讃岐にお移りになつてゐた。許されて御上京の途次御往生せられました。親鸞聖人も許されて京におかへりにならうとしたが、その道すがら法然聖人の御往生を聞かれ、法然聖人のおはしまさぬ京におかへりになる願もなくなつたとみえ、常陸の稻田の郷の稻田頼重の招待をうけてそちらへゆかれた。

その時聖人は四十歳であつた。それから二十年關東にお出になりました。その間に門弟が出來ました。門弟の或者は寺を持ちました。聖人はお寺をお持ちでなかつた。二十年庵に住んでお出になつた。そこで奥さんもお出來になつた。京から奥様がお出になつたといふ説と、京の奥様はお亡くなりになり、常陸で新しくお迎へになつたといふ説とある。又越後でお迎へになつた奥様であるといふ説もあります。お子様はそこで六人お生れになりました。もう一人初の奥様のお子様があつたといふことです。御家庭のことについてはいろいろの論がある。ともかく、そこで奥様を持たれ、お子様を六人お持ちになつた。關東には二十年おすまひになつた。そのころの庵には聖德太子様のお像をかざつてお念佛せられたのであります。當時聖德太子様のお像を刻んでお弟子達に頒けられたのが四十七體もあつたといふことであります。聖人の念佛は聖德太子様の傳統の佛教であつたといふことがさういふことでもわ

かります。聖人が六十の御時には既に奥様は越後にかへつてをられたといふことでもあります。近來の史家で、聖人の奥様は越後御流罪の御因縁で結ばれたのである、その御遺跡が近來發見せられた、それは越後の新井から信州にいく道であるというてをる人もある。これも新しい説で、昔の傳記にはないことである。

聖人は二三のお弟子と共に、二十年住みなれた庵を出られて東海道を三年旅せられました。今日その跡をみますと、聖人は太子堂を拜んであるかれたのであります。そしてその太子堂を守つてをる人と御縁が結ばれたのであります。東海道の所謂聖人の御舊跡地は當時の太子堂であつたやうであります。さうして段々京にお入りになりました。六十三歳であつた。それから二十七年間京にお出になつた。極くささやかなお暮しであつた。『御傳鈔』には「扶風馮翊ところどころに移住したまひき」とあります。お所が定つてをら

なんだのです。お寺もお持ちにならぬ。いろいろの京の學者とも交つてお出にならぬ。高官にも交つてをられない。ささやかな人とのお交りであつた。おかくれになつた時も御親類の別荘であつた。晩年のお召上りものも關東のお弟子がささげたり、末女の彌女様が奉公をしてその給金で御助勢してお出になつたやうであります。今日の本願寺を思ひますと思ひもよらんことでもあります。娘の奉公にいつた給金と、關東のお弟子からささげるお米やおあしで借家住居をしてをられたのであります。そして靜かにお聖教を拜見してをられたのであります。その間に『三帖和讃』をはじめ、たくさんのお著述が出来ました。そして九十の年に御往生せられたのであります。その時は彌女様が御介抱されたやうであります。その彌女様が奉公中に儲けられたお子様は覺惠様といふお方であつた。この方が出家せられた。その覺惠様にお子様があつた。覺如様である。この覺如様が後に本願寺を興されたのであります。

聖人がおかくれになつた際にお葬式萬端をだれがお世話したかといふに、關東にをりましたお弟子の顯智といふお坊さんである。この方は高田の専修寺の第二祖であります。第一祖は眞佛房といふ方であるが亡くなられ、顯智房が聖人のお指圖で住職をしてをつたのであります。この方が一の弟子である。専修寺は下野の高田にありましたが今から三百年前伊勢の一身田に移りました。その顯智房が萬事お世話してをつた。彌女様は顯智房に聖人のお墓の預り證文を書いてをられます。お父さんの墓をお守りするのにお弟子の方に證文を出すといふことも、當時聖人の御遺族に勢力のなかつたといふことがわかります。顯智房が一切のお世話をして、下野に歸られてから彌女様がお墓のお守りをせられた。覺惠法師は天台宗で得度して墓守りをしてをられました。

關東で教をうけた顯智房その他の人々が毎年十一月の二十八日になると京

に上つてきました。京で薫陶をうけた人々も聖人の御命日に集つて聖人をおしのびした。その集りを報恩講というたのであります。聖人の御恩を思うてつとめたのである。報恩講の本はそれである。お墓に集つた人は歸つた。まだお寺でなかつた。後に覺如上人がお生れになつた。覺如上人は、曾祖父さまである聖人のお徳を慕うてその足跡を廻つて、聖人のことを知つてをる人々にいろいろと聞かれた。さうして『御傳鈔』を作られた。それからだんだん報恩講に集つてくる人が多くなつた。遂に龜山天皇から久遠實成阿彌陀本願寺といふ勅額を賜つた。ここに本願寺といふものが出來た。覺如上人は本願寺を賜はられますと、親鸞聖人を第一祖とし、親鸞聖人の第一のお子さん善鸞様のお子様の如信様を第二祖とし、自分が第三祖となられた。この覺如上人のたくさんの御著述が残つてをります。覺如上人は今の本願寺を築かれた方であります。

本願寺はどうして出来たか。報恩講が本である。それからいへば、今日の東西本願寺は報恩講が基礎である。聖人が本願寺を建てられたのでない。聖人は、弟子達が寺を建てたいといふと、大きい寺を建てるなよ、ただ在家の普通の家より少し棟が高いほどのものを建てたらよい、と云はれた。御自身は一生寺に住まはれなかつた。二十九歳のときに聖光院の門跡になられたが、それも出てしまはれた。弟子にも寺を建てることをすすめられなかつた。ただ聖人のお墓にまゐつた人が報恩講をつとめた。その報恩講に集るものがだんだん多くなつた。そして教團が出来た。そのお墓守りの家が本願寺といふものになつた。それがだんだん成長して今日のやうなあの四十間四面の大堂になつたのである。ですから私は本願寺の御影堂にまゐりますと、聖人はわしをいやなところにおいておくとおもうてをられるだらうと思はれて勿體ない氣がします。庵の中にをられた方をああいふ大きいところにおいてあげては、

いやだと思つてをられると思ふ。かういふことをいふと教界の革命派と思はれるかしらんが、私は子供のときからさういふことを思つてをる。聖人を庵におかへしするがよいと思ふ。これは本願寺を破壊するといふのでない。さういふ氣持を門末のものが味はねばならんのでないかと思ふのであります。

今日宗教團體法によつて認められてをります浄土真宗は、簡単に真宗と申してをります。その中に十派に別れてをります。この真宗と申します教團の起りは、先から申すやうに、聖人の御在世に教をうけた人達が毎年聖人の御往生なされたお日柄に京へお墓まゐりにきて集つた、それが今日の真宗教團の本であります。それから、本願寺といふのは、そのときに龜山天皇様から下された御寺號であります。あとの各派はお弟子が建てられたお寺であります。ところでどの宗教でも開祖があります。またその信者達が開祖の御命日に開祖をしのぶ集りをいたします。親鸞聖人のお流のもの集りには報恩講といふ名がついてをります。そこに親鸞聖人の教といふものが現れてをるのであります。親鸞聖人の教の名を今日は真宗というてをります。實は浄土真

宗といふのである。徳川時代に浄土真宗といふのはいけないといふので問題が起きました。それは浄土宗の方から幕府の方へ抗議が出たのであります。浄土宗といふ外に浄土真宗といふと浄土宗は嘘宗になる。だからああいふ宗旨の名は禁じてもらはねばならぬ、と云ふのである。徳川の方では増上寺は徳川と御縁が深かつたもので浄土だけ取つて真宗といふ名にしたのであります。真宗はつぶさに云うたら浄土真宗であります。

浄土といふのは淨らかな土であります。佛教に二つの道があります。一つは難行道、も一つは易行道であります。難行道は陸道を歩いていくやうなものです。易行道は船に乗つて水路をいくやうなものである。難行道は自分の考を磨き、自分の智慧を磨いて佛になるといふ道である。易行道は佛のお力を信じていく道である。これは、お釋迦様がおかくれになつてから七百年目に南天竺に出世せられました龍樹菩薩が『十住毘婆娑論』に説いて下さつた

ことであります。それをうけ傳へて支那の唐代の始に出られました。道綽禪師が『觀經』の講義をした『安樂集』といふ書物を著されました。その中に龍樹菩薩の難行道・易行道といふことを傳統して、難行道は聖道門である、易行道は淨土門であると云はれました。聖道門は清らかな聖人の門である。淨土門は聖かな土の門である。聖道門といふのは個人的である。淨土門といふのは國家的である。この二つの門に分けられた。聖道門は一人で心を磨いていくのである。淨土門は佛の開かれた國土に皆と一緒に進んでいくのである。これは佛敎にさういふ流派があるのであります。

お釋迦様が大本お年を召されてから、王舎城の南西の方にある耆闍崛山で御自分の御信心の一つばいを弟子達に説かれました。そのお説法の今に残つてゐるのが『無量壽經』であります。この『無量壽經』の中にお釋迦様の御信心が細かにお説きになつてある。又或時靈鷲山で説かれた『法華經』とい

ふお經も残つてをります。『法華經』には空間的に八紘一字の御精神が述べてあります。『無量壽經』には時間的に天壤無窮の命の敎が説かれてあります。この『法華經』と『無量壽經』とは大乘佛敎の根柢をなしてをるのであります。日本の國體を明かに敎へていただくには『法華經』によつて八紘一字の廣いお心を窺ひ、『無量壽經』によつて天壤無窮の長い命を窺はしていただくことが出来るのであります。私共はこの二つのお經によつて日本の國體が世界的に明かに顯揚せられるといふことを確信してをるのであります。このうちの『無量壽經』は淨土門の敎を説いてあるのであります。

すつと昔、一つの國があつた。その國に世自在王佛といふ自覺者があつた。自覺者とは自己と世界とを覺つた人である。その國の王様はその世自在王佛の敎をうけてどうしても國王になつてをることに堪へられなくなつた。といふのは、印度は日本と違つて掠奪・侵略によつて建てられた國が多い。國王

は人民を治めてをるが、それは人民を搾取してそれによつて自分の榮譽を恣にするといふのが多いのであります。日本と國體が違ひますから王様というても日本の天皇様と別であります。印度にはろくな國がありません。私は印度にいつてみてつまらぬ國だと思つた。そして、お釋迦様が理想國家を述べられたとき、十萬億佛土の向うにあるとおつしやつたのが、なるほどさうだと思つた。印度人には佛國はわからぬのである。お前達にはわからぬぞ、すつと向うにあるのだぞ、と云はれたのは無理でないと思つた。さういふ理想の國をお釋迦様が頭に描かれたのである。さて、その王様は、どうも王位にをつてもわからぬで、王位を捨てて修行者になられた。そして無上正眞道というて、この上もない眞の道を求められた。そして心が明るくなつた。はじめて明るい心になつた。八紘一字の世界に出られたわけである。その時師匠の前でお禮を云うてをられます。

光顔嬌々として

威神極り無くまします。

是の如きの焔明

與に等しき者無し。

日月摩尼

珠光の燄耀も

皆悉く隠蔽して

猶し聚墨の如し。

如來の容顔は

世に超えて倫無し。

とお顔から第一に讚嘆してをられます。あなたのお顔は光り耀いてお出になります。お日様の光を拜んでも、お月様の光を拜んでも、珠の光を拜んでも

心が暗かつたのに、あなたのお顔をみて心が明るくなりました。心の曇がなくなりました。まことに尊いお顔であります、といふことを始として、お聲の讃嘆をし、お心の讃嘆をしてお禮を申してをられます。それが『唯佛偈』といふ偈文になつてをります。この王様は修行者になられたとき法藏菩薩といふたのですが、法藏菩薩が如何にも明朗な心になられ、暗い心から明るい世界に出られた。助かるとは暗い心が明るくなるのである。疑の心が信に入るのである。さうなると恐れはない、危みもない。大道を濶歩してゆけるのである。個人的のものがなくなるのである。個人的の心があつてはどうしても心が暗い。さういふものがなくなつて一切衆生と共に生きるといふ廣い心になる。さういふ心になつた法藏菩薩は一人でその心の世界を楽しんでをる事が出来なくなつた。主觀的の喜びにをることが出来なくなつた。さうした明るい心を基調とした客觀的の國家がほしくなつた。そこに、全人類一切衆

生と共に生きるといふ國家がほしくなつた。そこで御師匠様にそのことをたづねられた。御師匠様は、あなたの心を靜かに見なさいと云はれた。そこで法藏菩薩は沈黙考されます。それを五劫の思惟といふ。如何に理想國家を建設しようかといふことを考へられたのである。それから程經てお師匠様は、今ではあなたの考もまとまつたらうから、あなたの理想國家をみんなの前で述べたらよからうと云はれる。それから公衆の前で長い間思惟した理想國家の望みを述べられる。それを普通に阿彌陀如来の本願といふ。『無量壽經』には四十八願となつてをる。その一つ一つが理想國家の願である。先第一の願は、おれの國に地獄・餓鬼・畜生の三惡道のないやうにしたいといふのである。そのおれの國とおつしやるのは全世界である。おれの國の外に世界はないのである。阿彌陀佛の國の外に世界はない。無邊際である。だから阿彌陀佛の心の世界は唯一の世界である。阿彌

陀佛の心の外に世界はないのである。さういふ世界が西方十萬億佛土の向うにあるとお釈迦様は説いてお出になります。それは私らの境地から離れた遠いところにあるといふことである。お釈迦様がその國をみられた。その見えたい心をお説きになつたのである。その阿彌陀佛の心の世界が明かになると、阿彌陀佛の國土より外に何にもないことがわかるのである。だからお淨土にいくものはお淨土とは遠いところであると思つてお淨土にいつてみると、お淨土の外に何にもない、すべてがお淨土の外の世界ではないのであるといふことを知らしていただくのである。迷うた世界にをるならお淨土はないのである。一切衆生のうちに一人でも惱んでをるもののある間はまだお淨土は出來上らないのである。一切衆生のうちに一人も惱んでをるものがなくなるときに本當のお淨土の建設があるのである。その世界を發見するために修行せられたのである。永劫の修行である。その永い御修行の後に國土が成就した。

その國土を成就せられた佛を阿彌陀佛といふ。光明無量の故に阿彌陀と名け、壽命無量の故に阿彌陀と名く、光明無量は八紘一字、壽命無量は天壤無窮である。そのお心を具へた佛様、その佛様をたのむのであります。光明無量・壽命無量の阿彌陀佛に南無したてまつる。それが南無阿彌陀佛である。南無阿彌陀佛といふことは淨土である。淨土は南無阿彌陀佛である。南無阿彌陀佛の生活はお淨土の生活である。ですから、淨土門は念佛門である。その淨土の眞宗は眞實の宗である。それは念佛宗である。念佛が即ち淨土である。念佛者は淨土にをるのです。淨土が言葉に現れると南無阿彌陀佛である。南無阿彌陀佛とは光明無量・壽命無量に頭が下るのである。八紘一字・天壤無窮の大きい心の前に頭を下げるのが南無阿彌陀佛である。それが私共親鸞聖人のお宗旨の本尊である。それが淨土である。南無阿彌陀佛の中に淨土がある。淨土が南無阿彌陀佛である。だから本當に南無阿彌陀佛が信ぜられるとお淨

土がここまで出張である。十萬億佛土の向うでない。阿彌陀佛此を去ること遠からず、このお國が淨土である。日本帝國、これが淨土である。他へいく必要はない。十萬億佛土の向うの遠いお淨土にいかうと思つてをつたが、それは迷ひである。お淨土は近いところにあつたのである。日本の國であつたのである。八紘一字の心がわからず、天壤無窮のお心がわからないなら、日本國のお米を食べてをりながら外國人である。大阪あたりの闇相場などしてをるものは外國にをるのだ。眞暗闇の心である。だから闇相場である。天照大神様の外にをるのだ。さういふ人の日本は天照大神のお開きになつた國ではない。土蜘蛛か何かの世界である。日本は天照大神様のお照しの國だから明るのである。それを、こんなことでどうなるか、これでは末はどうなるか、商賣が立つてゆくか、生活が出来るかといふ。かういふ人は不安なのである。外國にをるのだ。闇に暮してをるのだ。さういふものには報恩講は

ないわけである。報恩講とは腹がふくれて明るくなつたものすることである。だから心の貧しいものには報恩講はありません。私は明日家に歸りますと村の門徒の報恩講にまゐります。私の村には貧しいものはをらぬ。金澤の門徒の家の中には毎年家をかへるやうなものををる。さういふ家にいくと佛様を襖にかけてある。あまり氣の毒なのでお布施をもらはんできたら二三年報恩講をつとめなんだ。しかしさういふ家が報恩講をつとめることは大變結構なことであると思ふ。満足してをるのかといふに、それはわからんが、形だけの報恩講である。形だけである。しかしそこがまたありがたいことである。私の方の國にをると報恩講をつとめないでをられないのである。それは土徳によるのである。今日この北橋さんの報恩講にまゐつても思ふ。土徳である。さすが石川縣に生れた人だけある。生れたそこが眞宗の繁昌なところである。そこに生れると、大阪にきてもだんだん自分の思ふことが満足し、財力が出

来ると、やはりふつとそこに報恩講を勤めようといふ心が起つてくるのである。これは親の恩である。又土地の恩であります。土佐の國のやうな佛法に御縁の薄い國に生れてをればかういふことはないのである。やはり土徳である。紀州の蜜柑の木を加賀に持つていつて植ゑると醋つばくなつて駄目である。紀州でなければうまくならないのである。土徳は大事である。日本の國に生れたればこそ、八紘一宇の大御心にもふれ、天壤無窮の御壽にもふれて喜びに入ることが出来るのであります。今日の報恩講も石川縣といふ土徳によつて北橋さんにさういふ心が起きたのであります。今日の報恩講は土徳と森さんの法縁とによつてつとまるやうになつたのである。北橋さんは自分の今までの營業はみな與はつてきたと思つてをられる。與はつたのである。與はるとは天がこの仕事をなさしめて下さるといふことであります。そこで淨土眞宗の教を親ひます。親鸞聖人のお著述があります。聖人の御

精神がそのまま流露したのが、『淨土和讃』『高僧和讃』『正像末和讃』であります。これが最も大切なるものであります。その御信心を系統的に説かれたのが『顯淨土眞實教行證文類』であります。その始に「謹んで淨土眞宗を按ずるに二種の廻向あり。一つには往相、二つには還相なり。往相の廻向に就いて眞實の教行信證有り。」と書き出してあります。「謹んで淨土眞宗を按ずるに二種の廻向あり」廻向とは廻轉趣向と申しまして淨瑠璃などに「廻向しようとおすがたを繪には描かせはせぬものを」といふ、ああいふ廻向はこちらから佛にものを差上げるといふ意味の廻向である。ところが親鸞聖人は廻向といふことは佛様から私共の下さるといふことである。だから他力廻向であります。この頃よく政治家が他力本願では駄目だ、といふやうなことを云ひます。あれは助かつてをらないからああいふことを云ふのである。私ら助かつてをるからさういふことはない。ここの北橋君も他力廻向に助かつてをるから報

恩講を營むのである。眞宗のものは皆助かつてをる。助かつてをらないものは報恩講は出来ないのです。「謹んで浄土眞宗を按ずるに二種の廻向あり。一つには往相、二つには還相なり。」往相とは往く相である、浄土往生である。還相とは浄土から迷うた世界に還つてくるのである。この二つが佛様から與へられるのである。お與へに二つある。極樂に往くのと、還るのと、ゆきしなの料金とかへりの料金と二つもらへるのである。「往相の廻向に就いて教行信證有り。」極樂に行くには教がなければならぬ。それから行がなければならぬ。信がなければならぬ。それから證がなければならぬ。この四つをみんなもらつてをる、教ももらふ、行ももらふ、信ももらふ、證ももらふ。その行とは南無阿彌陀佛を稱へることである。その南無阿彌陀佛を信ずる、それは信である。信ずる心も、念ずる心も行ずる心も彌陀如來より廻向しますなり、と蓮如上人は書いてをられます。教ももらふ、行ももらふ、信ももら

ふ、證ももらふ。みんなもらふ。それからお浄土にまゐつて、蓮台に寝てをるのでない。浄土にゆくことは娑婆に出てくるといふことである。還るのである。楠木正成公が戦死される時、弟正季公と共に、今ここで死ぬけれど七度び生きかへつて陛下の御恩に酬いたてまつらんと誓うて刺しちがへて死なれたといふ。七生は十生であり百生である。正成公は死なれないのである。何遍も日本に生れて、そして明治維新もせられ、今また昭和維新もせられるのである。死なぬ命に入るのである。それが天壤無窮の命である。護國の英靈は、天皇陛下のお召によつて親を捨て、妻子を捨て、家を捨て、職業を捨て、命を捨てて護國の英靈となられた。この英靈は天壤無窮の命に入つてをられるのです。死なれないのである。それを遺族のものは、かはいことをした、氣の毒なことをした、といふ。どこが氣の毒か。私は戦死者は仕合せだと思ふ。歸還して來るよりよいと思ふ。歸つて來たものは武運長久

だといふが、どつちが武運長久かわからぬ。歸つてきて再び本當の御奉公が出来ればよいが、歸つてきてからろくなことをせぬものがをる。さういふ人は戦死した方がよかつたかもしれぬ。出征するとき萬歳の聲に送られたのである。この頃萬歳と南無阿彌陀佛とちがふといふ人がある。あれは南無阿彌陀佛のいはれがわからんからさういふことを云ふのである。萬歳は無量壽である、無量光である。死ぬことがないのである。日本語で云へば萬歳、印度語で云へば南無阿彌陀佛である。南無阿彌陀佛が本當にわからぬから萬歳もわからぬのである。この萬歳が本當にわかれば南無阿彌陀佛もわかるのである。わからんでただ云うてをる人がある。萬歳は、個人主義自由主義のなかつた相である。個人主義自由主義の心が人生を暗くしてをるのです。さうして亂してをるのです。それが解消されにや本當の新體制は出來るのである。この頃常會をつくることが新體制であつたり、私有財産をみんな沒收される

のだといふ奴があつたり、新體制になると借金なしをせんでもよいやうになるのだというたりしてをる。新體制は結婚式に錢をかけないことだと云ふものもあるが、昔から乞食の嫁取は錢をかけなんだ。新體制になると法事にお齋を出さぬのだといふ。さういふことは貧乏人は昔からせなんだ。妙なことを云ふものである。さういふことは皆浮説流言である。新體制は近衛さんの云はれるやうに日本臣民の道をつとめてゆくことである。つとめていかぬものがあるから、つとめていくことに新の字がつくのである。新しいといふことは眞實の眞である。本當の日本精神に蘇ることが新體制である。ドイツの翻譯やイタリーの翻譯をしてこれが新體制だというてをるものがある。それも間違ひである。これは私が云ふのでない。近衛首相が日本臣民の道を全うするので云はれるのである。新體制は本當に他力信心を獲得せにや出來ないのである。神武天皇様が都を橿原にお開きになつて四年後に鳥見山に靈

時を設けられまして神を祀られました。その時のお勅語に

我が皇祖ノ靈、天ヨリ降り、朕ガ射ヲ光シ助ケタマヘリ。

と仰せられてあります。祖様の靈が天から降つて我を助けて下さつた、そのお助けのよろこびのあまり、今天神をお祀りするとおつしやつた。これが天皇様の皇祖皇宗をお祀りになります祭事の始であります。大政の始であります。そのお心をうけられたのが萬世一系の天皇様であります。それが大政である。それを翼賛したてまつるとは、その御心に従うて、おあとを慕うていくのである。それが大政翼賛である。大政翼賛の根本は親の御恩をよろこぶことである。お助けがなければ御恩がわからないのである。それがわかれば大政翼賛である。私共はおかげで他力廻向の御教を承つてをる。如來廻向を私共は現實にいただいてをる。皇祖皇宗の御廻向を現實にいただいてをる。私共のいただいてをるのは萬世一系の天皇様のおん形の上に現れて下さる御

廻向であります。教によつて、形のない世界に知られたことが、形の上に明かに喜ばしていただけることは、日本臣民としての貴いことでもあります。ですから私共には御信心と世渡りとは一つの意味になつてをります。御信心の相續が世の中の商賣である。お經の中に資生産業皆是佛法と説いてあります。又蓮如上人は、何事も何事も報謝と心得べきものなりとおつしやつてあります。ここに佛法は世法と別なものでないことがわかるのであります。一つなのであります。私共は聖人の御教によつてこの重大な時局下において心から陛下に御奉公さしていただくことの出来ることをありがたく喜ぶのであります。そして報恩講といふ意味が一層ありがたく喜ばれるのであります。聖人の教をうけたものは自分のあさましいといふことに氣がつかます。自分は個人的ものである、自分は身儘勝手のものである、といふことに氣がつかますと本當に頭を下げて御心を仰ぐのであります。お照らしをうければうける

ほど自分の身儘勝手なことを知らしていただいて、それを懺悔して、そして大御心の前に跪いて仰いでいく。これが日本臣民の道であります。天皇陛下の御徳の前に跪き、神様の前に跪く、それを教へてくださった師匠の前に頭を下げて、本當に拜んでいくところに、明るい世界があるのであります。我が浄土眞宗は拜むことを教へてもらふのであります。拜むとは謹みかしくむことであります。ここに神ながらの大道も明かに窺ふことが出来るのであります。今日報恩講を申される北橋君のこの心は、貴い御廻向であります。お力によつて報恩講を申さしてもらふのであります。そして報恩講を申して一層御恩を喜び、今日からのお仕事の上に御報謝の不行をさしていただくのであります。北橋さんの事業の成功は、普通の儲けるといふことでなしに、最も安い値段で食事をみなの人に提供しようといふその事實が今日のこの榮をなしてをるのであります。どこまでも根本の心を仰いで、そしてそこにお

與への貴さを仰いでいかれるのが、報恩講の生れてくる所以であるのであります。この報恩講もこの大きなお仕事の相續のために出来た報恩講であります。また相續のお仕事は光となつて、益々榮えていくことはありがたいことと思ひます。それにつけても、これは御両親及び祖先の御信心の徳である、また土徳であるといふことをお忘れないうにしていただきたいと思います。またそれをちやんと思つてをられるから自然郷里の永井さんを仰ぎ、また郷里の私をお招きになるといふ心も起きてきたわけでありまして、すべてが聖人のお手廻しであり、偉大な神佛のおはからひであることを思ひ、喜びと共に報恩講にあつてお話をさしてもらひました。實は今日の話を本にしてほしいといふことでありますが、さつぱりしたお話も出来なかつた。ゆつくり報恩講の意味、眞宗の意義を話して、その大體を知つていただきたいと思います。長い話になりました。話がわからなかつたら、これが本になりますからその時

またよくよんでいただくと思われる。今日北橋さんのこの御縁の開かれたことを感謝いたします。皆さんも靜かにこの法にひたつて下さつたことを感謝します。

あとがき

昭和十五年十一月二十二日、大阪の北橋茂男君の宅で報恩講がつとめられた。その折に導師をたのまれた。そして店員始め集つた人々に對して二席の講話をした。北橋君がそれを印刷に附して年始状のかはりに知友にわけたいと云はるので、その速記に筆を加へて北安田パンフレット第五十七として出版することにした。この頃他力本願では駄目だといふ人があるので、この講話では他力本願は皇國臣民の道であるといふ心持を語つた。それで本書を『他力本願の道』と題した。重大な問題を二時間ばかりで初門の人に語らうとしたのだから盡さない點がたくさんあるが、信に入り、臣民道をゆく人の衆にもなればよいと念ぜられるのであります。速記は平松子の勞によつたので

あります。

昭和十五年十二月七日

東京宮本家にて

曉烏敏

六〇

曉烏敏主要著作目録

◎更生三部作

第一卷	更生の前後	金壹圓
第二卷	獨立者の宣言	金貳圓
第三卷	前進する者	金貳圓

◎佛說無量壽經叢書

聽法	佛の釋尊	金壹圓
阿彌陀佛	の生るまで	金壹圓
嘆阿彌陀佛	偈の講	金壹圓
阿彌陀佛	とその師との問答	金壹圓
阿彌陀佛	の本願上の卷	金壹圓
阿彌陀佛	の本願下の卷	金壹圓
三誓	偈の講	金壹圓
阿彌陀佛	の修行とその淨土	金壹圓
本願	成就の信心	金壹圓
信心	生活の種々	金壹圓
東方	活の種々	金壹圓
聖行	段講	金壹圓

第第十第十第十第十第十第十第十第十第十第十
十五四三二一九八七六五四三二一

信國新無尊肉佛人神親ソ道蓮華運
土日罪嚴教生を驚ク如嚴命
の攝本の存の根とそテ人歸の
取の在の彼精解間念ス話論趣群
提と進宣認
唱殿路言識岸神決問念ス話論趣群

金金金金金金金金金金金金
貳參拾拾參貳參貳貳拾拾拾
拾拾五五拾拾拾拾五五五
錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢

第第十第十
十五四三卷卷卷

◎パンフレット

地老内
球省
を境
められたる
ぐりて明
て自己
歌集

金金金金
貳貳貳貳
貳參五貳
圓圓錢圓

第第十第十第十第十第十第十第十第十第十第十
十一九八七六五四三二一卷卷卷卷卷卷卷卷卷

母沈不常華諸温父死親生
默可倫嚴三かのの驚く
の說超昧のの聖る
の自出の中無印國
殺のするよ大
死者記者り常地象々論日

◎にほひぐさ叢書

詩歌集
詩歌集
詩歌集
詩歌集

歌異鈔第三・四・五・六節講話
歌異鈔第二節講話
宿業の超越(歌異鈔下篇第四節講話)

◎歌異鈔叢書

善五三
惡毒
薩段段
講講
道話話

金金金金金金金金金金金
壹壹壹壹壹壹壹壹壹壹
貳貳壹五五貳四貳參貳貳
拾拾拾拾拾拾拾拾拾拾
圓圓圓錢錢錢錢錢錢錢錢

金金金
九
壹壹拾
圓圓錢
金壹圓圓
圓圓圓
貳貳拾拾
錢錢錢

第
五 五 五 五 五 五 四 四 四 四 四 四 四 四 三 三 三 三 三
十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十
七 六 五 四 三 二 一 九 八 七 六 五 四 三 二 一 九 八 七

他國大國和進學永あ日皇聖日人神讚皇親聖神改
力命體協は親のが精道徳本生道佛太子殿下御誕生の底に流るる神ながらの道
本と順の精一こ人を懐お象臣第調佛伽陀和道陀觀性話
願の佛生ま語へ話微道二り和道陀觀性話
の道教活華心でるへ話微道二り和道陀觀性話

金
貳 四 四 四 四 四 四 四 四 貳 貳 貳 貳 貳 貳 參 參 貳 貳
拾 拾 拾 拾 拾 拾 拾 拾 拾 拾 拾 拾 拾 拾 拾 拾 拾 拾 拾
五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五
錢 錢 錢 錢 錢 錢 錢 錢 錢 錢 錢 錢 錢 錢 錢 錢 錢 錢 錢

第
三 三 三 三 三 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二
十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十
六 五 四 三 二 一 九 八 七 六 五 四 三 二 一 九 八 七 六

孝雪戰日自國報聖橫古ア闘大忠日主觀社この生真自
子の争由民恩徳川事メ争和義本主觀社この生真自
聖夜の教の育式子語のの超魂つ精的客觀的弟
徳のの考淵講奉講世印えのい精的客觀的弟
太法哲特考淵講奉講世印えのい精的客觀的弟
子話學質察源話讚話界象て話て神性察子定て神

金
貳 貳 貳 參 參 參 貳 貳 貳 參 參 貳 貳 貳 貳 貳 貳 貳 貳
拾 拾 拾 拾 拾 拾 拾 拾 拾 拾 拾 拾 拾 拾 拾 拾 拾 拾 拾
五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五
錢 錢 錢 錢 錢 錢 錢 錢 錢 錢 錢 錢 錢 錢 錢 錢 錢 錢 錢

佛說阿彌陀經講話 觀念に顯はれたる佛身佛土 金壹圓五拾錢
 王舍城の悲劇 (佛說觀無量壽經講話第二) 金壹圓五拾錢
 正信偈講話 金壹圓五拾錢
 水火中間の白道 (二河白道譬喻講話) 金壹圓五拾錢
 印度佛跡巡拜記 (曉烏敏 暉峻康範共著) 金壹圓五拾錢
 ハワイの印象 金貳圓五拾錢
 Makoto Kōkoro (『信の提唱』ローマ字書き) 金貳圓五拾錢
 智慧に於て 金壹圓七拾錢
 人 (隨筆) (中外出版株式會社刊行) 金壹圓七拾錢
 釋迦基督その他 (春秋社刊行) 金貳圓貳拾錢
 凡夫の道 (新英社刊) 金貳圓貳拾錢
 校定歎異鈔 金壹圓五拾錢
 聖德太子十七條憲法講話 (日本放送出版協會刊) 金壹圓五拾錢
 聖德太子奉讀講話 (東方書院刊) 金壹圓五拾錢
 曉烏敏講話集 (東方書院刊) 金壹圓五拾錢
 勤ける女性へ (京都一生命刊) 金貳圓五拾錢
 神武天皇建國の精神 (洛南教苑刊) 金貳圓五拾錢
 清澤先生臨末の御教訓講話 金貳圓五拾錢
 LA JAPANA SPIRITO
 Selections from the Nippon Seishin Library 金貳圓五拾錢

◎曉烏敏 佛教聖典叢書

第一篇	佛涅槃經	林五邦譯	金四拾貳錢
第二篇	大方廣經	林五邦譯	金拾貳錢
第三篇	大乘稻芋經	櫻部文鏡譯	金拾貳錢
第四篇	小象跡喻經	林五邦譯	金拾錢
第五篇	鸯掘摩經	林五邦譯	金拾錢
第六篇	鋸譬喻經	林五邦譯	金拾錢
第七篇	箭喻經	林五邦譯	金拾錢
第八篇	蛇喻經	林五邦譯	金拾錢
第九篇	蘇那檀陀經	林五邦譯	金拾錢
第十篇	外道問大乘無我義經	櫻部文鏡譯	金拾錢
第十一篇	究羅檀頭經	林五邦譯	金拾錢

曉烏敏主筆 願慧 定價一部拾圓 一ヶ年金壹圓

昭和十五年十二月廿五日印刷
昭和十六年一月一日發行

(一三〇〇)
他力本願の道
定價金貳拾五錢

石川縣石川郡出城村北安田

著作兼 發行人 曉 烏 敏

京都市烏丸通七條下ル西入

印刷人 堀 井 清

京都市東九條山王町三八

印刷所 弘文社印刷所

發行所

石川縣石川郡
出城村北安田

香 草 舍

電話松任局一八番
掘替金隣三六九八番

404
215

終



定價金貳拾五錢

MADE IN JAPAN